

明治天皇の御製をめぐりて

土屋博

明治天皇（一八五二年生れ、一九一二年七月三十日歿）は生涯にほぼ拾萬首（九萬三千三十二首）の和歌をお詠みになられたる由。與謝野晶子の五萬首を遙かに凌ぎ、ギネスブック並みの記録といふも過言には非ず。年単位にてみれば、日露戦争勃發の明治三十七年の作品最も多し。明治天皇の詠歌に熱心になりたるは、父の孝明天皇（一八三一年生れ、一八六七年歿）の影響甚だ大なり。會ふたびにお題を五つ貰ひ、詠みたるのちに菓子を頂くを常としたる由。次の歌道の師は三條西季知（一八一一年生れ、一八八〇年歿。いはゆる七卿落ちの一人）、更にその後の師は薩摩出身の高崎正風（一八三六年生れ、一九一二年歿。薩摩・會津同盟の立役者、明治二十一年御歌所初代所長。）なれど、天皇ご自身の作品なること言ふもさらなり。明治天皇は御製を公にするつもり無かりしかど、一部の人のみに拜誦せらるるは餘りに口惜しと、高崎正風氏、明治三十年頃以降新聞社に少しづつ漏洩させたる由。

御製について、北原白秋は「歌聖としての明治天皇は、その御風格に於てまことに大空の如くあらせられた。いかにも帝王の御歌柄であらせられた」とし、齋藤茂吉は、「その歌調の堂々たる、御心の直ぐなる、さながらを詠じたまひて毫も巧むことあれせられず、これ御製の特徴と拜察し奉る」とす。小生惟みるに、御製はいづれも分かり易き表現を特色とし、舊假名遣ひ、文語文法を學ぶ上にての恰好の基礎的教科書とならむ。また、讀めば讀むほど含蓄深く、結果として人格陶冶の効果も期待し得るかも知れず。

コロナ禍の令和三年の元日、JR原宿驛前の明治神宮看板には次の御製の掲げられたる由。「あらし吹く世にも動くな人ごころ巖にねざす松のごとくこ」

ドナルド・キーン氏の弟子ライトさんの新譯は以下の通り。

In a world of storms

Let there be no wavering

Of our human hearts;

Remain as the pine tree

With roots sunk deep in stone

小生の明治天皇御製に關心を持ちたる切掛は、新渡戸稻造の歴史的名著「一日一言」(實業之日本社、大正四年刊、ベストセラーとして當時の若者に大いに影響を與へたり。)を讀みたる時なり。

同書には數多の明治天皇の御製丁寧に引用せられ、新渡戸の御製への愛著振りに驚嘆したる覺えあり。

一月九日、「天を恨み人を尤むることはあらじわがあやまちを思ひかへさば」

二月十二日、「淺みどり澄み渡りたる大空のひろきを己が心ともがな」

二月二十三日、「器には隨ひながら岩ほをもとほすは水の力なりけり」

三月三日、「思ふこと繕ふこともまだ知らぬをさな心のうつくしきかな」及び「思ふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける」

三月十日(陸軍記念日)、「國を思ふ道に二つはなかりけりいくさの場にはに立つも立たぬも」

三月十七日、「取る棹の心長くぞ漕ぎ寄せん蘆間の小舟さはりありとも」

四月三日、「しき島の大和島根のをしへ草神代の種の残るなりけり」、「例ためしなく開け行く世を見ることもみちびく神のあればなりけり」及び「葦原の瑞穂の國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし」

五月七日、「覆へることもこそあれ小車の進むにのみは任せざらなむ」

五月二十九日、「目に見えぬ神の心に通ふこそ人のこころの誠なりけれ」

六月一日、「人皆のえらぶが上に選びたる玉にもきずのある世なりけり」及び「いぶせしと思ふ中にも選びなば薬とならん草もこそあれ」

六月二十七日、「世の中は尊き卑しきほどほどに身を盡すこそ務なりけれ」、「花になり實になる見れば草も木もなべて務はある世なりけり」及び「笛となり弓矢となりてくれ竹の世はさまざまにかはり行くかな」

七月七日、「天の原満ちたる星の影消えて月の光になれる空かな」

七月三十日、「人はたゞ誠の道を守らなん貴き賤き品はありとも」、「我が心いたらぬ隈もなくもがな此世を照す月の如くに」、「鬼神も泣かするものは世の中の人の心の誠なりけり」、「よきを取り悪きを棄て外國に劣らぬ國となすよしもがな」、「子らは皆戦の庭に出ではてゝ翁や一人山田守るらむ」及び「大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり」

八月三日、「暑しともいはれざりけり煮えかへる水田に立てる賤をおもへば」

八月三十一日、「重荷曳く車の音ぞきこえける照る日の暑さ堪へがたき日に」

九月二十五日、「むらぎもの心の限り盡してんわが思ふこと成りも成らずも」

九月二十七日、「並び行く人にはよしや後るとも正しき道を履みなたがへそ」

十月二日、「むらぎもの心つくして報いなむおほし立てつる親の恵を」及び「たらちねのみ親の教をこへあら玉の年ふるまゝに身にぞ沁みける」

十一月三十日、「何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身の爲にこそ」

十二月二十一日、「慕はしと思ふ心や通ひけんむかしの人ぞ夢に見えける」

十二月二十四日、「親も子も親しみかはし家の内の賑へるこそ樂しかりけれ」

いづれの御製も、若き青年讀者にとりては、熟讀玩味せば、血となり肉となる内容多々あるものと信ず。

特に小生の好むは、二月二十三日の歌なり。こはウォータージェット技術の有用性を先取りするものにて、事實を述べたるに過ぎざれど、含蓄は深し。戦後のリベラル派に通ずる、クリスチャンとしてのイメージ強き新渡戸なれど、目指すべき

方向性は、新渡戸も明治天皇もほぼ共通せること、改めて感じ入りたる次第なり。



以下に、小生の蒐集したる明治天皇御製に關係する古書籍を紹介せむ。

一「御製謹註 天津日影」池邊義象・彌富濱雄著

(吉川弘文館、明治四十四年刊、特製定價金壹圓五拾錢、二五六頁)

タイトルは「あまつひかげ」と讀み、「天の日の光」の意味なり。

例言に曰く、「仄つとに承れば、今上天皇陛下、萬機の政の御暇に、物にふれ事に感ぜさせ給ひて、よみ出でたまひし御製、今や十萬餘首に上れりとか。九重雲ふかき處、我等草莽の微臣、悉く拜誦の光榮をかたじけな忝かたじけなうせずといへども、既に世に漏れきこえたるもの、五百餘首に滿てり。さるは神を敬ひ、祖を崇び、國を思ひ、民をあはれみ給ふ御事よりはじめて、月、雪、花、紅葉に至るまで、かしこくも大御心の眞をうたひ出でさせ給へれば、拜する毎に、襟を正し、感極まりて涙さへ催さるゝは、誰人か然らざらむ。」と。本書は東京朝日新聞に連載せられたるものを校訂修補したるものなり。

冒頭に掲げられたるは、天の歌なり。「あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのがこゝろともがな」。浅緑色に澄み渡れる此の大空の如く大きく廣きを御自らの御心となされたとの大意なり。

二「明治天皇御製謹註」 亘理章三郎謹解

(明治圖書、大正十一年刊、定價金壹圓六拾錢、二四三頁)

序より、「天地を動かすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな」、「言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなむ」、「眞心を歌ひあげたる言の葉は一たびきけばわすれざりけり」本書の序文に於いては、右の御製を掲げ奉るの他に、一辭一語の讚すべきものがない、と。

冒頭の國に寄する祝ひの歌(「あら玉の年を迎へてよるづ民一つ心に國祝ふらし」)より三百五十六番目の歌(「こともなく調べあげたる言の葉の花にぞ匂ふ國の姿も」)まで収録せらる。後者の通釋は、「殊更の心がまへもしないで無造作に詠んだ歌の中に我が國の貴い姿もあらはれてゐることである」。

三「明治天皇 聖徳餘韻 全」 杉浦重剛謹選、大町桂月謹補

(世界文庫刊行會、大正十四年刊、定價金五拾錢、一〇四頁)

目次は、春夏秋冬、自然、神祇國、人事教育、仁義、歌述懷道など。

あとがきに桂月曰く、「神代に根ざして、世々を経て、明治天皇の大御心に發露した三十一文字の言葉の花は、敷島の道の精である。大和魂の粹である。」と。杉浦重剛先生は拜選の半ばにて世を去られたる由。冒頭に掲げられたるは明治三十七年新年祝の歌(「あしはらの國のさかえを祈るかな神代ながらの年をむかへて」)なり。

四「明治天皇御集 昭憲皇太后御集 全」

(内外書房、宮内省御許可、昭和四年刊、並製天金五拾錢、二八一頁)

明治天皇崩御後御製の公刊を求むる聲朝野に捲き起り、宮内庁にて編纂を重ね、大正十年遂に宮内省藏版「明治天皇御集」文部省より公刊せらる。収録歌は千六百八十七首。本書は更に昭憲皇太后御集をも含むもの。

五「明治天皇御製謹解」北原種忠著

(皇道會出版部、昭和八年七版、正價金五圓、四二六頁)

初版は大正十三年。はしがきに曰く、「明治天皇は、政務と軍事とに御繁劇の御躬に在らせ給ひながら、我が國風たる歌道には深くも御心を寄せさせ給ひ、御詠草の數も拾萬首の多きに及びぬとかや。而して其御製たるや、月雪花などの風流の爲ではなく、寧ろ概ね教訓となり修養となる金玉の諷詠であつて、皇國民の活ける經典として仰ぐべきのみではなく、全人類の教憲として萬世に傳はるべき至寶である」と。

目次は、鏡、璽、劍、治國、仁德、忠、孝以下、養藥、學、和歌までのジャンル別なり。冒頭に掲げられたるは神器鏡の歌、「榊葉にかけし鏡をかがみにて人もこころを磨けとぞ思ふ」。天照大神が天岩窟に籠りし折に榊葉を八咫鏡に懸けたる故事に基づき、明鏡を己が身の手本となせとの趣旨なり。末尾に掲げられたるは、「いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひ入りぬる道の爲めには」、苟も敷島の道に志す者は、寢ても寤めても道のことを忘るることは出来ぬとの趣旨なり。

和親の歌として、「四方の海みなはらからと思ふ世になどなみ風の立ちさわぐらむ」掲げらる。解説は、「全世界の國民は皆同胞であるとのみ思つて居るのに、などて忌はしき戦争などが起つて、四方の海面に波風が起ちさわぐであらうぞ、さてさて嘆かはいしい次第であるとの御述懐なり。英國人アーサー・ロイド氏(宣教師、ケンブリッジ大學卒業。慶應義塾及び東京帝國大學の英文學教授)は、此等の御製を英譯し各國の主權者に贈り、米國大統領ルーズヴェルト氏の如きは殊に感激の深かつた由」云々。

六「明治大帝 御製日訓 附教育敕語」高橋成年謹纂

(愛之事業社、昭和八年二十版、定價金壹圓、三六五頁)

初版は昭和三年。一月一日の箇所は、「田に畑に雪ぞ積れる民のためゆたかにと思ふ年のはじめに」なり。陛下に於かせられては、元日に五穀豊穰を祈り四方拜を行ふが通例なり。十二月三十一日の箇所は、「あら玉の年の終も近づきぬ暑し寒しといひ暮す間に」なり。昔の人も言ひける通り、光陰は矢の如く、日月流水に似たり。

七「陸軍省御校閲 明治天皇御製讀本 天之卷 忠君愛國篇」陸軍中將吉江石之助監修

(三陽書院、昭和八年十版、定價金八十五錢、奉仕特價金五拾錢、本文二三八頁)

初版は昭和七年十一月。文部省認定。

目次は、第一章國體、第二章皇軍、第三章忠節、第四章禮義、第五章武勇、第六章信義、第七章質素。

國體の箇所にては、大町桂月の「國家に就て」なる文章(「日本に生れたる者先づ日本の歴史を讀め」)のあとに、明治十五年河水久澄の歌、引用せらる。(「昔より流たえせぬ五十鈴川なほ萬代もすまむとぞ思ふ」)

徳富蘇峰の「明治天皇を偲び奉りて」なる文章(「要するに明治天皇の御代は、三千年に垂なんなんとする帝國の史上に於て、希有であるばかりでなく更らに卓越であつた」)のあとには、御製「わが心いたらぬくまのなくもがこの世をてらす月のごとくに」掲げらる。

八「明治天皇御製謹解 御聖徳日訓」寒河江三郎謹編

(愛之事業社、昭和十年刊、定價金壹圓、三七四頁)

貴族院議員海軍中將佐藤鐵太郎題字、宮中顧問官元諸陵頭山口銳之助謹序。

編者寒河氏自序に曰く、「我等國民は一致協力してこの大日本帝國をして眞の一大家族たらしめ、國威を世界に宣揚するのが義務である。畏れ多くも 明治大帝に於かせられては、下國民として心得おく可き規範を御示し給うた御事が、御製となり、諸大家の謹話となつて現はれてゐる。」と。

一月一日の箇所は、明治二十三年の寄國祝の歌にて、「新玉のとしを迎へて萬民ひとつごゝろに國いはふらし」。十二月三十一日の箇所は、明治四十五年の心の歌にて、「如何ならむ事ある時も空蟬の人の心よ豊かならなむ」。失意の中に居る時も常に心は豊かに保ちたきものなり。

九「明治天皇御製謹釋」大坪草二郎謹釋

(岡村書店、昭和十一年刊、定價金壹圓、三〇〇頁)

序に曰く、「天皇御一代の御製二萬一千十首は、ことごとくこれ聖徳のあらはれとして、また歌道において比なき尊貴なる玉詠として、日本國民の永久に景仰し奉るべきものである。本書は御製中の三百首を主とし、これを春季、夏季、秋季、冬季、聖訓、及び補遺の六篇に分類して謹釋し奉つたものである」と。

冒頭は新年の「神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物のはじめにぞきく」に始まる。物のはじめは毎年一月四日に行はるる政治始を指し、伊勢大神宮のことを奏上するを聞召す。掉尾を飾れるは「しきしまのやまと心をうるはしくうたひあぐべき言の葉もがな」にして、謹釋者の大坪氏は「何等のたくらみもなく、さながらに詠み出で給へる御製が、すべて金玉の調となつて萬世に輝くこと、吾等の目のあたり拜しまつるところである」と締め括る。

十「明治天皇御製日訓 心之日記」高橋北堂謹纂

(自治調査會、昭和十二年刊、定價金七圓、本文九六〇頁)

題字は、明治神宮宮司・海軍大將有馬良橘閣下（「よもの海みなはらからと思ふ世になと波風のたちさわくらむ」を謹著）、陸軍中將佐藤清勝閣下、陸軍主計總監辻村楠造閣下。

宮中顧問官・元學習院長山口銳之助閣下、序に曰く、「明治天皇の御製はその御一代に於て無慮十萬餘首、其數に於て實に古今獨歩の境地を馳せ給ふのみならず、其御諷詠の豊かにも亦妙へなる、而も月雪花などの風流のためでなく、寧ろ概ね教訓となり、修養となる金玉の鳳詠であつて我等國民の活ける經典、人類の教憲、萬世に傳ふる至寶であることは、殊更らに叙説し奉るを要せぬ。……冀くは此の書を拜誦することによつて、畏くも明治天皇の御聖徳、自ら日常の間に發露するもの多きを翫味し奉り、内に省みて苟も人に長たる者の修養の資とすると共に後進指導の教材となし、幸に邦家のため、民人のために淬礪努力する一大警策たらしめられんことを」と。

一月一日の箇所は、「新らしき年を迎へて富士の嶺の高きすがたを仰ぎ見るかな。十二月三十一日の箇所は、「あらたまの年のをはりもちかづきぬ暑し寒しといひくらすまに」。

十一「明治天皇御製日訓」宮中顧問官山口銳之助監修

（愛之事業社、昭和十二年刊、定價金壹圓、三六五頁）

一月一日の箇所は、明治二十三年寄國祝の歌（「新玉のとしを迎へて萬民ひとつごころに國いはふらし」）なり。解説には、「新年を迎へた國民が皆一つ心になつて、聖壽萬歲、國家隆昌、家運長久を祝ふことであらうと、畏れ多くも新年に際して、陛下には大御心を下萬民の上に注がせ給ふ御製と拜し奉る」とあり。また、十二月三十一日の箇所は、明治四十年民の歌（「すゝむ世を見るにつけても思ふかなわが國民のうへはいかにと」）なり。文明開化の世の中を見るにつけ、世に遅れる國民は居らぬか、貧しき國民は居らぬか、道に迷へる國民は居らぬかと氣づかはれる陛下のご様子なり。

十二「明治天皇御製讀本 教育敕語附」陸軍中將吉江石之助監修

（愛之事業社、昭和十三年三十四版、定價金壹圓、二五〇頁）

初版は昭和八年。乃木希典謹書直筆コピーの教育敕語を含む。目次は、第一章國體の精華、第二章克ク忠ニ、第三章父母ニ孝ニ、第四章兄弟ニ共ニ、より第十六章敬神崇祖、第十七章不斷の修養まで、教育敕語の順に逐條的に教訓を説く。

國體の精華の箇所には引用せられたる御製は、明治三十七年の寄道祝の歌、「ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ」。臣民の箇所に引用せられたる御製は、「ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくすまことは」。

勤勉の光明の箇所には乃木將軍の「分陰（一分一秒の時間）を惜むといふ習慣を養ふことが大事」との文章のあとに、御製「秋の夜の長きを何にかこつらむなすべき事の多くある世に」掲げらる。

十三「明治天皇御集 全」宮内省藏版

（岩波文庫、昭和十三年刊、定價四十錢、二五八頁）

御製の配列は、作成年代順なり。巻末に初句の索引ありて便利。

冒頭に掲げられたるは、明治十一年以前の作、新年望山の歌（「新しき年を迎へてふじのねの高きすがたを仰ぎみるかな」）なり。

十四「新抄 明治天皇御集・昭憲皇太后御集」

（角川文庫、昭和四十八年三版、定價二百圓、二九九頁）

初版は昭和四十三年。配列は作成年代順。末尾に索引あり。

冒頭に掲げられたるは、明治二年春風來海上の歌（「千代よろづかはらぬはるのしるしとて海邊をつたふ風ぞのどけき」）なり。

十五「明治天皇御製・教育敕語 謹解」

